広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	院政鎌倉期における日本漢字音の位相差 ： 『群書治要』鎌倉中期点と三巻本『色葉字類抄』鎌倉初期写本との比較から
Author(s)	黒木, 裕梨香
Citation	論叢 国語教育学 , 17 : 13 - 22
Issue Date	2021-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52315
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052315
Right	
Relation	

院政鎌倉期における日本漢字音の位相差

―『群書治要』鎌倉中期点と三巻本『色葉字類抄』鎌倉初期写本との比較から―

黒木　裕梨香

一　本稿の目的

本研究では漢字音の位相差について明らかにすることが目的である。平安時代後期、院政鎌倉期において、大学寮や博士家では漢籍の学習や研究が漢音で行われ、寺社では一部を除き仏典読誦が呉音で行われたことが先行研究で明らかになっている[1]。また仏教の宗派の違いによる仏典読誦音の位相差も先行研究によって明らかになっており、大学寮や博士家、また仏教の範囲では位相差についての研究が進んでいる[2]。

しかし、当時の日常語の漢字音については先行研究が少なく、まだ研究が進んでいない。そこで漢字音の音形、声調の比較を通して、研究の場と日常の場での漢字音の位相差を明らかにしたいと考えている。

本研究における「位相差」とは書写者・加点者の「社会的属性」の差から生じる「言語変異」（「様相」）と定義する。また、声点は六声体系の声調を示すもの、音形の表記は当時の漢字音を反映するものと考える。

二　対象資料

本研究では、同時代の研究の場で用いられる漢字音と日常の場で用いられる漢字音を比較する。そのため、日常の場で用いられる語が多く収録されている尊経閣文庫蔵三巻本『色葉字類抄』、また同時代に研究の場で用いられ、かつ尊経閣文庫蔵三巻本『色葉字類抄』と比較されたことがない資料として宮内庁書陵部蔵『群書治要』を選択した。先行研究で宮内庁書陵部蔵『群書治要』は漢音が中心であり、尊経閣文庫蔵三巻本『色葉字類抄』は漢音と呉音が混ざっていることが分かっている[3]。漢音同士を比較することができることも、研究対象をこの二つとした理由である。

㈠宮内庁書陵部蔵『群書治要』

『古典研究會叢書　漢籍之部　第九巻　群書治要㈠』を利用する。本論中の『群書治要』に関する画像は、宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧の書誌書影・全文影像データベースを利用する。これは北条実時が清原教隆から伝授された金沢文庫伝来の巻子本（巻四・一三・二〇を欠く）で、書写は一二五〇年（建長二年）である。

本研究では経部を対象とする。以下『群書治要』と呼ぶ。

㈡尊経閣文庫蔵　三巻本『色葉字類抄』

前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成18　色葉字類抄一』を利用する。本論中の『色葉字類抄』に関する画像は、国立国会図書

館デジタルコレクションを利用する。著者は橘忠兼であり、尊経閣文庫蔵本は前田侯爵家蔵の複製である。中巻と下巻の一部を欠く。一九二六年に育徳財団から影印本が出版されている。内容としては平安時代末期の日常実用の語を主に、漢文訓読語をも合わせて、広く和語・漢語を採録しており、それらの表記漢字と用法についていろは順に並べ、さらに意義によって分類したものとなっている。

以下、『色葉字類抄』と呼ぶ。尊経閣文庫蔵三巻本『色葉字類抄』を特に指す場合は「前田本」と呼ぶ。

㈢古典保存会三巻本『色葉字類抄』黒川真道蔵江戸時代中期写本

国立国会図書館デジタルコレクションを利用する。『古字書索引叢刊　色葉字類抄漢字索引』では尊経閣文庫蔵三巻本『色葉字類抄』を底本としているが、欠けている中巻及び下巻（「由」の一部、「女」「美」の全部及び「師」の一部）を古典保存会三巻本『色葉字類抄』に依っているため研究対象とする。以下、『色葉字類抄』と呼ぶ。特記して古典保存会三巻本『色葉字類抄』を指す場合には「黒川本」と呼ぶ。

三　研究の方法

宮内庁書陵部蔵『群書治要』をもとに作成された『宮内庁書陵部蔵本　群書治要　經部語彙索引』の字音索引に掲載されている語を、尊経閣文庫蔵三巻本『色葉字類抄』をもとにして作成された『古字書索引叢刊　色葉字類抄漢字索引』全八巻を用いて照らし合わせ、語、または熟語が一致したものを抽出する。抽出した語の音形、声調を比較し、考察することで位相差が明らかになると考えている。都合上、分析の際は、三省堂『全訳　漢辞海　第四版』（以下『漢辞海』）を用い、漢音、呉音などの判断を行った。

四　『群書治要』と『色葉字類抄』の比較検討

『群書治要』、『色葉字類抄』に共通した字のうち、どちらの資料にも音形、声点が記載されているものに限定して分析を行った。さらに音形が一致したもの、音形が不一致であったもの、声調が一致したもの、声調が不一致であったものと分類した。

以下、研究対象とした『群書治要』『色葉字類抄』に共通した字を一覧で示す。熟語は対象となる字に傍線を付した。

阿、哀、嚶々、晏、蠜夷、易、移、友、左右、蜉蝣、裕、郵、昏姻、昏姻、汗穢、羽、雩、營々、盈、莢、偏役、偏役、窈窕、要、鉞、閲、塩梅、悪、闇、安、異、宥、逸、隠、于、菀、員、慍、耘、纓、益、悦、掩、愆、燕、愛悪、於、何、假借、假借、嘉、夏、暇、樌、荷、俄、害、改、蓋、誡、享、剛、巧言、康、槁、蒿、號、行、徳行、行歩、衡、誥、鏗鏘、獒、假、角、赫、隔、革、樂、樂器、飢渇、合、甲、蛤、乾、姦、干、幹、旰、簡、翰、間、幾、機、畿、祁、虧、起、飢渇、宜、劓、義、議、丘、仇、舅、歆、禁、禽、強、鄉黨、鄉、墟、兢々、興、凝、屨、屨、愚、和、鰻寡、寡、果、瓦、回、槐、曠野、圖畫、巨猾、完、權、觀、鰥寡、歸、龜、供、共、恭、鈞、群、獄、輗、迎、孽、儉、嫌疑、嫌疑、謙、儼然、乾、賢、蹇、姑、滸、股肱、股肱、蠱、午、候、政、哭、穀、坤、昆弟、艮、嗟嘆、坐、冢宰、材、斎戒、竈、五藏、讒、殘、之、屍、參差、參差、施、梓、造次、造次、死、熾、耒耜、耒耜、肆、胔、謚、基趾、雌、食、鴟、齒、脩、蒐、柔、忱、譖、小車、傷、商、將、象、鏗鏘、餉、戍、俊士、寒暑、稱、鍾、仍、蔬食、食、信、振、紳、親、辛、惴々、細砕、綏、緌、正月、

聲、不請、齊、抄、沼、薺、詔、蹐、鶺鴒、鶺鴒、節、妾、熸、痁、箭、膳夫、賤、餞、怠荒、怠荒、殆、擔、貪欲、平旦、嗟嘆、塗炭、持、知、童稚、童稚、誅、放逐、丈夫、場、張、除、寵、重、九重、勅、陳、朝廷、悌、泥、冢宰、彫、朝、窈窕、調、北狄、廛、圖、塗炭、度、怒、彤、桐、痛、黈纊、黈纊、荒癈、塩梅、肺、配、苞、剝、罰、板、煩、燔、班、絆、藩、蠻夷、丕、庇、皮、紕、微、魑魅、魑魅、四夫、濱、臏、閔、傳、傳、吉甫、膚、蜉蝣、賦、跗、福、分、聞、名聞、嬖、嬖、屏、病、辨、冕、報、封、暴雨、葑、豊、冒、毛、童蒙、謀、墨、牧、和睦、冥、名聞、銘、軛、予、豫、墉、容、庸、相應、貪欲、欲、翼、耒耜、雷、勞、雒、臈、利、吏、流、栗、霖雨、量、属鏤、令、囹圄、囹圄、礪、賦斂、牢籠、牢籠、鏤、論、王、王者、威、畏、維、緯、筠、榮、垣、汗　　以上三九二字

四―一　『群書治要』と『色葉字類抄』の音形

四―一―一　音形について

『群書治要』と『色葉字類抄』で共通した字の音形について、【表一】に示す。なお空欄は用例がないことを示す。不明は『漢辞海』に記載がない音形のことを示す。また、複数の漢字音を持つ字については、漢字音ごとにカウントをしている。漢呉同音形は、『漢辞海』において漢字音が漢音呉音で同じ形をとるものを指す。また、慣用音は『漢辞海』において日本で慣用的に用いられている音を指す。

例として、『色葉字類抄』で漢音一九一例とあるものは、『群書治要』でも漢音である用例数である。

【表一】音形について

	群書治要				
	漢音	呉音	漢呉同音形	慣用音	不明
漢音	191	1			3
呉音	24				3
漢呉同音形			110		
慣用音			1	1	
不明					28

音形が不一致である字は、最も多いものが『群書治要』で漢音、『色葉字類抄』で呉音となる例であり、二四例あった。二四例のうち、一例を左記にあげる。該当箇所に傍線を付した。

①「貪欲」

『群書治要』　タンヨク　（巻二　一〇七行）

『色葉字類抄』　トンヨク　（巻上　ト　疊字　六二丁裏一）

貪について、「タン」は漢音、「トン」は呉音である。

用例が最も少ないものは、『群書治要』で呉音、『色葉字類抄』で漢

音となる例で、一例あった。用例②である。

②「分」

『群書治要』　ブン　（巻一　三五七行）

『色葉字類抄』　フン　（巻上　ワ　辞字　八八丁裏六）

ここから、音形について、『群書治要』では漢音、『色葉字類抄』では呉音を示しやすいことが、字のレベルで起きていることを確認した。

四―一―二　-m 韻尾と-n 韻尾について

『群書治要』と『色葉字類抄』の「ム」と「ン」の表記に注目し、分析を行った。-m 韻尾は「ム」、-n 韻尾は「ン」と表記することが平安時代後期に定着したが、『群書治要』、『色葉字類抄』では「ム」と「ン」の混同が見られる[4]。例を左記に示す。

-m 韻尾

③「譖」

『群書治要』　シン（巻九　三〇一行）

『色葉字類抄』　シム（巻下　シ　人事　七二表七）

-n 韻尾

④「隠」

『群書治要』　イン　（巻三　六一行）

『色葉字類抄』　イム　（巻下　キ　天象　五五丁表七）

-m 韻尾と-n 韻尾の表記について、『群書治要』と『色葉字類抄』での共通した字のうち、-m 韻尾、-n 韻尾の字についての分析を行った。結果を次頁の【表二】に示す。なお、『群書治要』のみ音形が示され、『色葉字類抄』で音形が示されていない例については除外した。また調査範囲において『色葉字類抄』のみ音形が示され、『群書治要』で音形が示されていない例は存在しなかった。

-m 韻尾の表記の揺れについて『群書治要』で九例全てが「ン」、『色葉字類抄』では「ム」が六例、「ン」が三例であった。『群書治要』では-m 韻尾を「ン」で表記し、『色葉字類抄』では-m 韻尾の表記が混同していることが分かった。

-n 韻尾の表記の揺れについて『群書治要』では五三例全てが「ン」、『色葉字類抄』では「ム」が一例、「ン」が五二例となった。ここから『色葉字類抄』は-n 韻尾の「ム」と「ン」の混同が起きてはいるが、-m 韻尾ほど進んでいないことが分かった。

前述したように、-m 韻尾と-n 韻尾の表記は、平安後期ごろに中国語音に基づいて、-m 韻尾は「ム」、-n 韻尾は「ン」と区別することが定着した。しかし院政末期から鎌倉初期において「ム」と「ン」の表記が混同し、鎌倉中期ごろには「ン」で統一された[5]。

【表二】の結果から、『群書治要』は-m 韻尾と-n 韻尾は全て「ン」で統一され、書き分けは行われない。『色葉字類抄』では-m 韻尾は「ム」、-n 韻尾は「ン」という書き分けは行われているものの、徹底したものではなく、混同している状態だと捉えられる[6]。これは『群書治要』と『色葉字類抄』が書写された時期の違いが関わっていると考えられる。

【表二】-m韻尾と-n韻尾の表記

	群書治要		色葉字類抄	
	ム	ン	ム	ン
-m韻尾	0	9	6	3
-n韻尾	0	53	1	52

【表三】声調について

		群書治要					
		平声	平声軽	上声	去声	入声	入声軽
色葉字類抄	平声	86	18	4	27		1
	平声軽	2	5		2		
	上声	2		21	3	1	
	去声	6		3	23		2
	入声					2	1
	入声軽					3	2

四―二　『群書治要』と『色葉字類抄』の声調

『群書治要』と『色葉字類抄』の声調について、【表三】に示す。なお空欄は該当する用例がないことを示す。

注目したいのは、漢音の平声は呉音の上声・去声となり、漢音の上声・去声は呉音の平声となりやすい現象だ[7]。この現象であるもの、またこの現象だと考えられるものについて、『群書治要』で平声となり『色葉字類抄』で上声となるものが二例、去声となるものが六例ある。『色葉字類抄』で平声となり、『群書治要』で上声となるものが四例、去声となるものが二七例あった。計三九例あった。

四―三　『群書治要』と『色葉字類抄』の音形、声調が不一致である字について

つづいて、音形が一致し声調が不一致であった字、音形が不一致であり声調が一致した字、音形と声調がともに不一致であった字という分類で分析を行った。

四―三―一　音形が一致し、声調が不一致である字

音形が一致し、声調が不一致である字について、注目するのは平声と上声・去声が交替しやすい現象だ。この現象が起きたと判断できる例、また疑わしい例の声調に注目すると、一七例中一五例が『群書治要』で上声・去声、『色葉字類抄』で平声であった。一例を⑤に示す。

⑤「鏤」ロウ　漢音
『群書治要』　去声　（巻六　四九四行）
『色葉字類抄』　平声　（巻上　チ　辞字　六八丁裏二）

『漢辞海』によると、一五例のうち音形は漢音が八例、漢呉同音形が七例であった。⑤のように、『群書治要』『色葉字類抄』ともに音形は漢音であるが、声調は『群書治要』と『色葉字類抄』で異なるという結果となった。

結果から考察を行う。音形が漢音であるのに『色葉字類抄』で呉音声調を加点した理由として、加点者が誤点した可能性、もしくは呉音声調と一致する、日常で使用される別の声調体系に基づいて加点した可能性が考えられる。

四―三―二　声調が一致し、音形が不一致である字

声調は一致するが、音形が不一致である字について、多くは「ム」と「ン」の混同のような、表記の揺れによって音形が不一致となることが明らかとなった。本研究で問題とする漢音と呉音については、⑥「囹圄」、⑦「童蒙」の二例であった。

⑥「囹圄」上声濁

『群書治要』　レイキョ　漢音　（巻六　二一一行）

『色葉字類抄』　レイコ　呉音　（巻下　ヒ　地儀　九〇丁裏六）

⑦「童蒙」　平声

『群書治要』　〇ボウ　漢音　（巻八　五五一行）

『色葉字類抄』　トウモウ　呉音　（巻上　ト　疊字　六二丁裏一）

これらはそれぞれ『群書治要』では漢音＋漢音、『色葉字類抄』では漢音＋呉音の音形の熟語である。藤本(二〇一六)によると、『色葉字類抄』仏法部内で仮名音注が漢音＋呉音、呉音＋漢音の混ぜ読みが散見されること、またその仮名音注はある程度成熟した読みであることが考えられるとある。[8] ⑥⑦の例も、『色葉字類抄』は日常の場で通用していた読みが、『群書治要』は漢音で統一された規範的な読みが、それぞれ音形に反映されていると考えられる。

四―三―三　音形、声調ともに不一致である字

音形と声調ともに不一致である字について、音形が不一致である理由を見ていくと、『群書治要』では漢音、『色葉字類抄』では呉音という違いが最も多かった。そのうち声調が不一致である理由が、平声と上声・去声が交替する現象であるものは五例であった。五例の内訳は、『群書治要』で平声である字が『色葉字類抄』で去声が一例、『群書治要』で去声である字が、『色葉字類抄』で平声が三例、平声軽が一例である。この五例のうち②「分」を除く八例は音形が全て『群書治要』が漢音、『色葉字類抄』が呉音である。五例を示す。

①「貪欲」

『群書治要』　タンヨク　平声　（巻二　一〇七行）

『色葉字類抄』　トンヨク　去声　（巻上　ト　疊字　六二丁裏一）

②「分」

『群書治要』　ブン　去声濁　（巻一　三五七行）

『色葉字類抄』　フン　平声　（巻上　ワ　辞字　八八丁裏六）

⑧「徳行」

『群書治要』　〇カウ　去声　（巻八　七六行）

『色葉字類抄』　トクキヤウ　平声濁　（巻上　ト　疊字　六三丁裏三）

⑨「令」

『群書治要』　レイ　去声　（巻七　六四行）

『色葉字類抄』　リヤウ　平声軽　（巻上　リ　人事　七三丁裏一）

⑩「魑魅」

『群書治要』　チヒ　去声濁　（巻五　三五行）

『色葉字類抄』　チミ　平声　（巻下　ス　人倫　一一四丁裏五）

ここから、音形は『群書治要』では漢音、『色葉字類抄』では呉音を示し、それに伴い、声調も交替する字があることが分かる。これは『群書治要』は漢音、『色葉字類抄』は呉音を示すという先行研究を裏付ける結果である。

四―四　本節のまとめ

本節では、以下のことが分かった。

○音形が不一致であり、声調が一致する字については表記の揺れが原因となるものがある。

○『群書治要』は-m 韻尾と-n 韻尾は全て「ン」で統一され、書き分けは行われない。『色葉字類抄』では-m 韻尾は「ム」、-n 韻尾は「ン」と混同している状態である。

○『群書治要』では漢音、『色葉字類抄』では呉音を示しやすいことが個々の字のレベルで確認された。

○熟語について、『群書治要』は規範的な読みを、『色葉字類抄』は日常の場で通用していた読みを反映している。

○音形が一致し、声調が不一致である字について、音形は同じ漢音でも『群書治要』と『色葉字類抄』で声調が異なる字があり、加点者が誤点した可能性、もしくは呉音声調と一致する、日常で使用される別の声調体系に基づいて加点した可能性が考えられる。

五　呉音、漢音資料との比較

本節では調査対象の用例うち、特に『群書治要』と『色葉字類抄』で音形が不一致であった字、もしくは声調が一致しなかった字について、他の呉音資料、漢音資料を用いて考察を行った。

『群書治要』と『色葉字類抄』で音形、もしくは声調が不一致であった字について、まずは呉音資料を用いて検討を行う。韻母、声母、声調について比較し、全てが一致したものは呉音とする。一致しなかったものについては、漢音資料を用いて、韻母、声母、声調を比較する。ここで一致したものは漢音とする。それらを比較、検討し、『群書治要』と『色葉字類抄』の位相差について考察を行う。

資料として、『日本霊異記』『華厳経音義』『類聚名義抄』『大般若経字音点・音義』を使用する。なお、以上の資料は小倉肇『続・日本呉音の研究』を用いる。各資料の写本などは左に示す。

呉音資料

『日本霊異記』　興福寺本・国立国会図書館本・真福寺本・前田家本

『華厳経音義』　新訳華厳経音義私記・高山寺本「新訳華厳経音義」・高山寺本「貞言華厳経音義」

『類聚名義抄』　観智院本「類聚名義抄」・天理本「最勝王経音義」・西念寺「類聚名義抄」・鎮国守国神社本「類聚名義抄」・高山寺本「類聚名義抄」・宝菩院本「類聚名義抄」・図書寮本「類聚名義抄」

『大般若経字音点・音義』　安田八幡宮本「大般若経字音点」・慈光本「大般若経字音点」・「大般若経字抄」・

無窮会本「大般若経音義」・「経字引」・薬師寺甲本「大般若経音義」・薬師寺乙本「大般若経経音義」・薬師寺丙本「大般若経音義」・薬師寺丁本「大般若経音義」

漢音資料として、『蒙求』、『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉初期点、久遠寺蔵『本朝文粋』鎌倉中期点を使用する。以上の資料は佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』に依る。

呉音資料、漢音資料の検討の結果、『漢辞海』では判断がつかなかった例のうち、半数が『群書治要』『色葉字類抄』ともに音形、声調が漢音となることが分かった。これは漢音と中古音体系が異なるものであることを示す[9]。音形に注目すると、『群書治要』では漢音が二一例、漢呉同音形が六例、となった。『色葉字類抄』では呉音が三例、漢呉同音形が三例、漢音が一五例であった。『群書治要』と比較し、『色葉字類抄』では呉音を示しやすい結果となった。

また、平声と上声・去声と交替しやすい現象について、②「分」を除いて『群書治要』では漢音、『色葉字類抄』では呉音であることが分かった。このことからも『群書治要』では漢音、『色葉字類抄』では呉音が示されやすいことが、他の漢音資料、呉音資料と比較した場合にも言える。これは『群書治要』、『色葉字類抄』それぞれが用いられた場の位相差により、『群書治要』では漢音、『色葉字類抄』では呉音を示したのではないだろうか。

六　本研究の成果

本研究は『群書治要』と『色葉字類抄』の漢字音の位相差について研究を行った。本研究の成果は以下の通りである。

○音形について、『群書治要』は漢音、『色葉字類抄』は呉音を示しやすいことが字のレベルで確認することができた。

○『群書治要』は-m韻尾と-n韻尾は全て「ン」で統一され、書き分けは行われない。『色葉字類抄』では-m韻尾は「ム」、-n韻尾は「ン」と混同している状態である。

○熟語について、『群書治要』は規範的な読みを、『色葉字類抄』は日常の場で通用していた読みを反映している。

○音形が一致し、声調が不一致であるという特定の場合において、音形は漢音であるが、声調は『群書治要』と『色葉字類抄』で異なることがある。加点者が誤点した可能性、もしくは呉音声調と一致する、日常で使用される別の声調体系に基づいて加点した可能性が考えられる。

○平声と上声・去声が交替する現象について、『群書治要』では漢音、『色葉字類抄』では呉音の声調を示しやすい。

○漢音と呉音の音形、声調は中古音体系と異なるものである。

○『群書治要』『色葉字類抄』どちらも漢音を示すが、声調が一致しない字があることがある。

○『群書治要』は漢音、『色葉字類抄』は呉音を示しやすく、これは各資料が用いられた場の違いによるものである。

用例数が少ないため断定はできない。しかし今回の調査範囲に限定すると、次のことが考えられる。

『色葉字類抄』は呉音を示しやすいこと、熟語に漢音＋呉音の混ぜ読みがあること、漢音の音形であるが呉音声調と一致する声点を加点するなど、『色葉字類抄』の編纂者や加点者の日本語に対する認識がそのまま反映されているのではないかと考えられる箇所があった。これ

は日常の場で使用される日本語を示しているのではないだろうか。

対して、『群書治要』では漢音を示しやすいことや、熟語の混ぜ読みがないこと、漢音の音形には漢音声調の声点を加点していることから、ある規範に基づいていると考えられる。これは、研究の場で使用される規範意識のある日本語を反映しているのではないだろうか。

以上の点から、本研究では『群書治要』と『色葉字類抄』の音形と声調に、研究の場と日常の場という用いられる場による位相差があった可能性を指摘する。

注

一　沼本克明（一九八二）『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』　六三・六四頁

二　佐々木勇（二〇〇九）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』研究篇　汲古書店　九頁

三　佐々木勇（二〇〇六）「改編本『類聚名義抄』と三巻本『色葉字類抄』の漢音」『訓点語と訓点資料』一一六巻　二九―五一頁

四　沼本克明（一九八六）『日本漢字音の歴史』　東京堂出版　二四一頁

五　注四　同著　二四二頁

六　調査範囲外の用例では-m 韻尾を「ム」で表記する例もあるため、完全に区別がなくなったとは言えない。

七　注一　同著　五八五頁

八　藤本灯（二〇一六）『『色葉字類抄』の研究』　勉誠出版　五一二頁

九　『漢辞海』は『広韻』をもとにした中古音体系の韻母、声母、声調を示している。

参考引用文献

・宮内庁書陵部蔵『群書治要』
（URL　http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=069336）
最終閲覧日：二〇二一年二月一日
・尊経閣文庫蔵　三巻本『色葉字類抄』
（URL　上 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1885583
下 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1885605）
最終閲覧日：二〇二一年二月一日
・古典保存会　三巻本『色葉字類抄』黒川真道蔵江戸時代中期写本
（URL　上 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1186797
中 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1185401
下 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1186813）
最終閲覧日：二〇二一年二月一日
・「Web 韻圖～廣韻檢索～」
（URL　http://suzukish.s252.xrea.com/search/inkyo/index.php）
最終閲覧日：二〇二一年二月一日
・中田祝夫等編『色葉字類抄並びに総合索引　黒川本・影印篇』　一九六四　風間書房
・島田友啓編『古字書索引叢刊　色葉字類抄漢字索引』　一九七〇　平野綜合印刷所
・沼本克明（一九八二）『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
・沼本克明（一九八六）『日本漢字音の歴史』　昭和六一年　東京堂出版
・古典研究會『古典研究會叢書　漢籍之部　第九巻『群書治要㈠』』　一九八九　汲古書院
・前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成『色葉字類抄』』　一九九一　八木書店

・築島裕編『日本漢字音史論輯』　一九九五　汲古書院
・小林芳規等編『古典籍索引叢書一〇　宮内庁書陵部蔵本　群書治要經部語彙索引』　一九九六　汲古書院
・佐々木勇（二〇〇六）「改編本『類聚名義抄』と三巻本『色葉字類抄』の漢音」『訓点語と訓点資料』一一六巻　二九―五一頁
・佐々木勇（二〇〇九）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』研究編・資料編　汲古書店
・月本雅幸等編『古典語研究の焦点』　二〇一〇　武蔵野書院
・小倉肇（二〇一四）『続・日本呉音の研究』第Ⅰ部研究篇・第Ⅱ部資料篇一(上)・第Ⅱ部資料篇一(下)・第Ⅱ部資料篇二・第Ⅲ部索引篇　和泉書院
・藤本灯（二〇一六）『『色葉字類抄』の研究』　勉誠出版
・佐藤進等編『全訳　漢辞海』第四版　二〇二〇　三省堂

（広島大学大学院博士課程前期一年）